

【デンマークでの合同研修を終えて】

特別養護老人ホーム ありすの杜きのご南麻布 3階管理者 正垣 幸一郎

チェックインしようとしてパスポートを機械にかざすと「ターミナルが違います。第2ターミナルへ」の案内とともに冷や汗が額から脇から噴き出てきた。慌てて集合場所に無料送迎バスで移動した。トラブルを最初に起こしたのはリーダーの私だった。今回の合同研修はデンマークが会場。デンマークへの直通便が取れなかったため、フランス CDG 経由となった。フランスの夜を満喫した後にコペンハーゲンを目指し空港にチェックインしようとするも一人のメンバーだけ機械に読み込めない。何度繰り返してもできない。先に入った3人も待っていたが追い出される。コペンハーゲンへ辿り着けるのか？と SAS のサービスポイントで確認するとすぐに読み込んでくれたので無事出発。

荷物はコペンハーゲンへ直接行くことになっていた。当然、全員がそうなっていると思い込んでいたが、コペンハーゲンで baggage を取りに行くも一人のメンバーのバッグだけ出てこない。その人の Baggage label を確認すると CDG となっていた。私たちの合同研修は波乱万丈の幕開けとなった。

ノーフェンスホイスコーレに到着するとそこで学んでいる Momoyo 先生と学生が暖かく迎え入れてくださりロスバゲした彼が困るだろうとスーパーへ買い物に連れて行ってくださった。その後、学生たちと数時間交流会を持ちこの街のことが少し理解できるようになった。

翌日、合同研修の初日最初の授業は Momoyo 先生の授業「福祉国家を支えるシステム・考え方」だ。最初にこの授業を受ける必要性が私たちにはあった。これを知っていなければ次からの視察、見学をスムーズに理解することはできなかつただろう。Momoyo 先生の背景を知ることから始まり税金の高い国、人間観（ヒューマニズム）、出会い、情報の共有、連携から連帯へ、バックアップの体制、関係性の土台と進んでいった。なぜデンマークはこのような国になったのかの根拠として歴史的な背景があり、国民を国が守る姿勢が出来上がっている。「ゆりかごから墓場まで安心して暮らせる国」を作るために高い税金を国民が払っている。国が保障してくれるという安心がポイントのような気がする。医療、教育、介護の分野を無料で受けることができるのは国民にとって大変重要である。同日の夜 19 時からの千葉先生の話も共通している部分がたくさんあった。私は現場上りの人間なので、二人の話はとても心に響いた。特に特養の現場を知り、認知症コーディネーターの資格を持つ Momoyo 先生の話はとても共感できた。内容はもちろんのことだが、話す人の情熱が伝わる講義だった。朝の 9 時から始まり 22 時まで行った合同研修初日。めちゃくちゃ疲れたが、初日から幸せな時間を過ごすことができた。さすが、「世界一幸せな国デンマーク」と感じさせられた。

私が印象に残ったことをあと 2 つ書いておきたい。一つは母子シェルターの視察、見学に行った時のことだ。その施設の対象者である女性が私たちの前に出てきてくださり、施設にくることになった経緯や現在の心境を語ってくれたことだ。感情を込めてご自身の体験を涙ながらに話ししてくださったことに大変感謝している。当事者の声を聞くということの重要性を体感することができたのは言うまでもないだろう。最後にもう一つ伝えたいことがある。仲間を越えた同志と出会えたことだ。彼らと共に過ごすことができたことを心から感謝している。たくさんのトラブルと思い出をありがとう。

【デンマークでの合同研修を終えて】

久留米市訪問リハビリテーション 理学療法士 坂田 猛

デンマークの首都、コペンハーゲン空港に到着して長旅の疲れもそこそこに、新たな国で様々な体験ができる事に期待して、スーツケースを受け取りいざ出発！と思った矢先、自分のスーツケースが届いていない…。先行き不安な中、デンマークの夢のような車窓と研修生仲間に励まされながら、無心の状態で Nordfyuns Højskole へ到着。若い日本人の学生達と Momoyo 氏が出迎えてくれた。衣服が1セットしかない状態で到着したが、様々な人たちの協力を得て、問題なく生活することができた。日本での自分は、助けられることは恥ずべきことだと考え、ともすれば拒絶さえしていた。しかし、ロストバゲージ（結果、11日遅れて到着）により人の助けを得ないと生活自体ができない状況となり、人の有り難みや、感謝する気持ちを改めて心底理解した。振り返ると、この体験は自分の考え方を強制的にリセットできた貴重な出来事だと思っている。研修生仲間には戻ってきたスーツケースに変な愛着が湧いてしまったが…。

若くして様々な理由で入学している日本人の方達とも、少ないながらも貴重な意見交換ができた。皆さん高い目的意識で在学しており、話しているだけで自分の刺激になった。そんな皆さんでも異文化との摩擦に苦悩している一端を知り、身の引き締まる思いがした。合同研修では様々な講義を聞き、様々な場所へ赴いて見学をさせていただいた。教育、医療、介護・支援の3分野の連帯がデンマークでは非常に高度になされており、その研修計画を素晴らしい構成と熟練のファシリテーション能力と情熱で導いてくれた Momoyo 氏と千葉氏には感謝してもしきれない。

言葉や定義を深く洞察・理解して、間違いが起きないように努める、はっきりとしたコミュニケーションを取る姿勢。自分で考える教育姿勢とそれを促していく専門性の高い哲学を持った福祉関係者。何かあれば対応するチームが迅速に発足し、課題解決を重視する高度な専門性を持ったアプローチと連帯。現場の声を優先して、それを反映させたシステムと法律。予測可能なデータを基に、出来る限りの受け皿を準備しておくソフト・ハード面の周到さ。全ての年齢層に基本的に平等な人権の捉え方と隣人を愛するという宗教的・歴史的背景。本当のノーマライゼーションとその言葉が当たり前すぎて使われないほど浸透している状況。情報収集と改訂をして更なる改善を求める姿勢。支援を必要としている人へ当然のような支援できる社会。

これらは文字上・インターネット上で得られる情報だと言う人がいるかもしれない。しかし、自分の時間を割いてでもこの国に来てよかったと今では思える。交流、対話、寄り添う気持ち。全ては人間同士が行うことで、情報をただ知っているだけの無機質なものではない。日本という国の文化や背景を当たり前に行っている環境から脱する事によって、初めて理解することが大いにあると感じつつ、これを形容する難しさと、自分の課題をはっきりと認識させてくれた、デンマークに心から感謝した合同研修だった。デンマークの街並みを1人で散歩していて、見ず知らずのアジア人に「Hej!」と笑顔で挨拶してくれる通りすがりの住民に、今回の学びの一端を感じさせてくれる国、それがデンマークなんだと感じた。

【デンマークでの合同研修を終えて】

バット博士記念ホーム 心理療法担当職員 今野 直子

海外研修が始まって2週間、毎日何かが起こり、もう何か月も経っているかのように錯覚している。合同研修は、最初の5日間だけで、その後は2か月一人。出発前は、「合同研修は他の参加者と一緒だし、Momoyoさんが通訳してくれるし、本番はその後だ」と思っていた。大きな間違いだった。まずトランジットで一泊するパリでスーツケースが手元に戻らないということが羽田で判明して急遽買い物を走ったところから旅が始まった。パリで搭乗手続きができないメンバーが出たり、コペンハーゲンでメンバーのロストバゲージ発覚など研修先のノーフェンスホイスコーレに到着する前にたくさんのが起こりすぎて、到着した時には私は疲弊し切っていた。しかしホイスコーレでは、副校長の Momoyo さんを始め、日本人学生の皆様が到着を待っていてくれて、その後の滞在中も何かれと我々のお世話をしてくれた。疲れと今後の研修の不安の中でそれがどれだけ有難かったか。合同研修が終わって皆でコペンハーゲンに向かった時もトラブルがあり、居合わせたノーフェンスの学生に助けをいただき最後までお世話になりっぱなしだった。合同研修の後半から、ノーフェンスがあまりにも居心地が良く、ここを出て、一人で2か月研修することが嫌になる程だった。こうした艱難辛苦と一緒に乗り越えたメンバー達とは、昔からの仲間のような関係になったと感じている。日頃培ってきた鎧が無意味となる異国で、多くの人に支えられていると強く実感できた期間であった。

研修では、様々な角度からデンマークの福祉に触れさせていただいたが、お話を聞かせていただいた方も、高い専門性とそれに裏打ちされた自負を持ち、自分たちの実践を制度と理論で説明する言葉を持っていた。福祉の専門家の養成課程の話を知ると、日本よりも資格認定の要件が厳しく、資格を得た段階で一定のレベルに達していることが求められる。日本のように、一年目だからまだこれからだね、というのは通用しないようである。「プロなんだから当然でしょ？」資格を得てもなお甘えが残る自分を恥じた。

感銘を受けたものの一つに、福祉職の労働環境がある。保育園では職員が屈んだり、子どもを持ち上げないように台などの工夫がなされていた。特に、そうした台に乗るように子どもに教えるという、ともすれば職員が楽をするために利用者を動かしている、と捉えられかねないようなことも行われていた。また矯正分野の現場では、勤務開始前後の振り返りが設定されていて、勤務中の心に引っかかったことを共有し、デブリーフィングを行うことがシステムとして組み込まれているとのこと。福祉職が心身を傷めてしまう可能性を認識し、その対処方法をシステムとして考えていることに驚いた。福祉職の自己犠牲への甘い幻想を私は捨てきれないが、それを真っ向から否定するシステムだった。

第二次大戦後、日本は経済に力を入れ、デンマークは福祉に力を入れる選択をした、国家の力点が違ったのだからデンマークの福祉と日本の福祉を比較して、日本が遅れていると思う必要はないと Momoyo さんは仰っていた。デンマークだけでなく、今後の研修で我々がうかがう各国の福祉は日本とは取り巻く状況が違う中で展開されている。研修で体験したものの何を取り入れるかをよく考えて挑む必要があることをこの最初の5日間で学んだ。

【デンマークでの合同研修を終えて】

社会福祉法人飛鳥学院 児童養護施設飛鳥学院 児童指導員 竹島 隆二

個別研修に至るまでの1週間を振り返ると、本当に凝縮された1週間であったことを痛感する。始めは、リーダーの正垣さんが羽田の集合ターミナルを間違い、預け荷物検査では私の荷物が一向に通らず何回もやり直し。場所替え置き方を変えても通らず。さらに場所を変えて3度目の正直で何とか通過。コペンハーゲン直通ではなくフランスのシャルルドゴール経由であった為、シャルルドゴールで1泊しコペンハーゲンに向かう。しかし、この時もなぜか私の航空チケットだけチェックインできず、時間ギリギリまで粘り、滑り込みセーフでチェックインして何とかコペンハーゲンに到着。ようやく一安心かと思いきや、今度は坂田さんのトランクが一向に回って来ず。噂にはよく聞いていたが、まさかのここで「ロストバゲッジ!」。カウンターにて状況説明して確認すると、何とシャルルドゴールに置いてきぼりなことが判明。とにかく送ってくれるとのことで今日は諦め、いざノンフュンスホイスコーレへ。隣のフュン島の端までここからタクシーで2時間の道のりであった。

ノンフュンスホイスコーレに到着すると、Momoyoさんと日本人学生が寒い中、待って出迎えてくれた。ここに来るだけでとんでもない数のトラブルがあり、疲れ切っていたものの、温かい出迎えに我々一同は感無量であった。Momoyoさんや学生が優しくここでの生活について教えてくれ、本当にありがたかった。翌日からは、みっちり毎日研修を行った。休み時間には積極的に学生とコミュニケーションもとった。デンマークの様々な文化に触れ、教育観、福祉観についても多くを学び、感じる事ができた。中でも私が一番印象的であったのが、どこの施設、学校、幼稚園・保育園にもびっくりするほどの量のボードゲームがあり、皆がそれで休み時間に遊んでいることだ。IT文化が発展し日本は特に携帯依存やゲーム依存が増え、子どものコミュニケーション能力の低下が著しいと感じており、我々の施設でもコミュニケーション能力の向上に力を入れている。その一環としてボードゲームがとてもよい効果を発揮すると考え積極的にボードゲーム遊びを取り入れていたところであったので、このように当たり前が皆がボードゲームをしている光景には大変驚いた。カード決済が当たり前、郵便も電車もほぼ全てがアプリ決済で、現金を使うことなどほとんどないIT化の進んだデンマークでもこういったコミュニケーションツールを残し、それが浸透しているのを肌で感じた。こういった現状もデンマークの教育観、福祉観の中から何らかのエビデンスを基にしているのだろうと考えさせられた。

1週間の合同研修が終わり、ついに個別研修にそれぞれ旅立つ日がきた。未だに坂田さんのトランクは届かないが…。しかしそんな事が霞んでしまう位に、皆寂しい気持ちになった。トラブルがある度に4人で助け合い、笑い飛ばし合い、乗り越えてきたので4人の絆は本当に強く深くなったと感じた。特に今野さんの英語スキルは完璧で皆がおんぶにだっこ状態だったのは間違いない。これから1人で研修していくのは確かに不安だけでなく楽しみもあるが、同じ志の最高の仲間と過ごしたとてつもなく濃い1週間の思い出すと皆と別れたくなくなる。でも、「この濃い1週間の思い出を力に代えて残りの個別研修、全力で頑張っていこう」と声を掛け合い、そして自分自身に言い聞かせた。最高の仲間とはまた日本で会って、思い出話をして笑い合いたいと思う。